

## 尾原ダム展示室

子供から大人までダムのことを知っていただけるさまざまな展示を行っています。また地域情報やイベント情報を発信しています。



〒699-1342  
島根県雲南市木次町平田 211-5  
(尾原ダム管理支所内)  
TEL:0854-48-0780 FAX:0854-48-0783



## 斐伊川放水路事業記念館

斐伊川放水路事業の目的や事業のあゆみ、また斐伊川放水路事業により生活環境が大きく変わった沿川地域のことなどを、各種展示を通じて紹介しています。



〒693-0022  
出雲市上塩治町 964 番地 1  
(斐伊川出雲市河川防災ステーション地内)



## 大橋川コミュニティセンター

治水3点セット、大橋川の歴史、過去の水害、景観とまちづくり、水環境についてなど、パンフレット・パネル等を多数取り揃えています。



〒690-0887  
松江市殿町383番地(山陰中央ビル1階)  
TEL:0852-28-3621 FAX:0852-28-3623



令和5年は、改修起工式(大正12年5月7日)より100年目です



国土交通省 中国地方整備局  
**出雲河川事務所**

発行：令和5年4月1日  
(令和5年9月26日改)

# 斐伊川・神戸川改修 100年のあゆみ



## CONTENTS

斐伊川・神戸川改修100周年にあたって	2
斐伊川水系の概要①	3
ヤマタノオロチ伝説と斐伊川	5
斐伊川水系の概要②	9
利水の歴史と現在	11
斐伊川水系治水事業のあゆみ【年表】	13
主な治水事業のあゆみ	15
明治時代～昭和初期 洪水への初の科学的アプローチと直轄事業への着手	17
昭和初期～昭和44年 悪化する河床状況に迫られる抜本的対策 (1969)	19
昭和47年洪水 市街地を襲った昭和の大洪水 (1972)	20
昭和50年～平成22年 斐伊川流域の総合的な治水事業へ (1975) (2010)	22
上流のダム建設 志津見ダム建設事業(昭和61年(1986)～平成23年(2011))	24
上流のダム建設 尾原ダム建設事業(平成3年(1991)～平成24年(2012))	25
中流の放水路建設 斐伊川放水路事業(昭和56年(1981)～平成25年(2013))	26
下流の河川改修 大橋川改修事業(昭和57年(1982)～)	28
湖岸堤整備事業	30
自然との共生を目指して	31
斐伊川・神戸川改修100年の整備効果	33
これからの100年に向けて	34

## 斐伊川・神戸川改修100周年にあたって

国土交通省 出雲河川事務所

所長 小谷 哲也



この地に初めて出雲人が暮らし始めてから、幾年の歳月が流れてきたことでしょう。

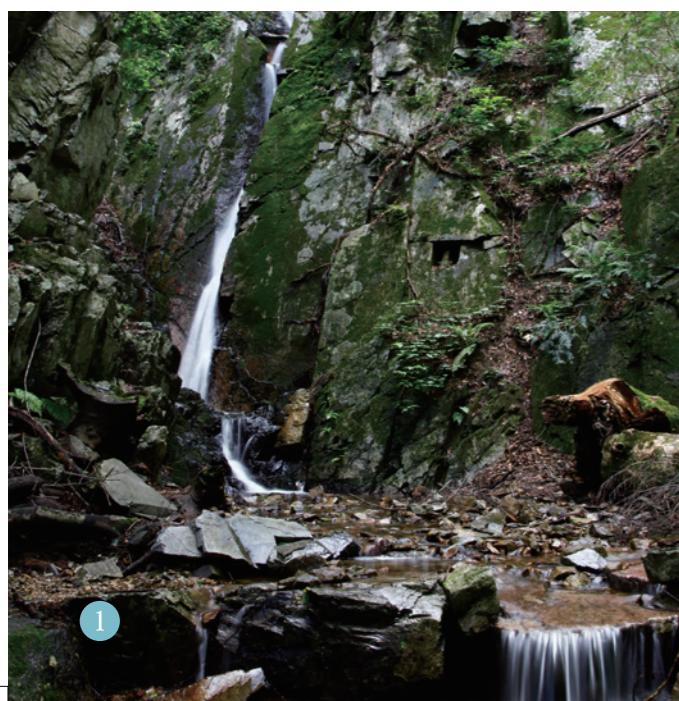
斐伊川は、少なくとも「日本書紀」や「出雲風土記」などに、その名が記されてから千数百年。「簸の川上」や「斐伊の大川」など、時代とともにその呼び名を変えながらも、今も変わることなく、その豊かな水により、私たちの暮らしに多くの恵みを与えてくれるとともに、時には八岐大蛇の鋭い牙がごとく洪水を引き起こし、私たちの暮らしに大きな被害をもたらしてきました。

江戸時代の頃より始まった砂鉄採取のための「鉄穴流し」により、斐伊川は多くの砂が上流から下流へ流送され「天井川」に姿を変えるとともに、幾多の氾濫を繰り返し多くの被害をもたらしましたが、人々は幾度となく立ち上がり洪水とともに運ばれる土砂を利用し、現在の出雲平野という豊かな土地を生み出し、多くの恵みをもたらしてくれたことも事実です。

近代における斐伊川の治水の歴史は、大正11年に当時の内務省(現在の国土交通省)が、国の直轄事業として改修事業に着手しましたが、戦局の悪化や世界恐慌により事業の一時中止を余儀なくされました。その後、昭和47年7月豪雨による甚大な被害を受け、抜本的な治水対策を強力に推進するため、当時の島根県知事により斐伊川・神戸川を一体として、それぞれの上・中・下流で治水機能を分担することを基本とした「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画(通称: 3点セット)」が公表され、関係自治体・島根県・国が一体となって治水事業を推進してきました。

事業の推進にあたっては、多くの関係者の皆様方に、思い出の詰まった家屋や先祖伝來の貴重な土地、ダム湖や放水路へとその姿を変えたふるさとの風景など、これから斐伊川流域に暮らしていく方々の安全・安心を守るために、大きな決断と御協力を頂いたことに、深く感謝申し上げます。

大正12年の起工式から数え、斐伊川水系の改修工事も100周年を迎えました。近年、広く認識してきた気候変動により、これまで行ってきた治水対策による施設機能を上回る洪水の発生は否定できません。このため、斐伊川水系においても流域に住む一人一人が自分事として、地域の安全・安心の向上に携わる気持ちを胸に、流域全体で新たな治水対策に取り組んでいく必要があります。「新オロチ退治」ではありませんが、安全・安心で豊かな斐伊川流域となることを目指し、あらゆる関係者の皆様方と協働しつつ、斐伊川と流域の皆様方の声を伺いながら、引き続き斐伊川の治水対策に取り組んでまいります。



# 斐伊川水系の概要①

斐伊川流域は松江市、出雲市、米子市他の7市2町からなり、面積は2,540km<sup>2</sup>、流域の土地利用は、山林等が約89%、水田や畑地等の農地が約9%、宅地等その他が約2%となっています。また、流域内人口は約50万人です。

※平成22年度河川現況調査結果より

## ■流域諸元

### 斐伊川流域の諸元

水源地 及び標高	斐伊川:島根県仁多郡奥出雲町 船通山 1,143m 神戸川:島根県飯石郡飯南町 女亀山 830m		
流路延長	斐伊川 153km(船通山～境水道) 神戸川 82km(女亀山～神戸川河口)		
流域面積	斐伊川	神戸川	全体
	2,070km <sup>2</sup>	470km <sup>2</sup>	2,540km <sup>2</sup>
土地利用別	山林等 (約89%)	農地 (約9%)	宅地等その他 (約2%)
	約2,260km <sup>2</sup>	約230km <sup>2</sup>	約50km <sup>2</sup>
湖沼の面積	面積	周囲長	平均水深
宍道湖	79.1km <sup>2</sup>	47km	4.5m
中海	86.2km <sup>2</sup>	105km	5.4m
大臣 管理区間	斐伊川 (境水道 ～本川上流)	剣先川	八間川
	107.4km	3.7km	0.7km
	神戸川	尾原ダム	志津見ダム
	12.0km	16.0km	13.4km
			斐伊川放水路
	4.1km	4.1km	
	157.3km		



## 斐伊川の概要

斐伊川は、その源を島根県仁多郡奥出雲町の船通山(標高 1,143m)に発し、起伏が穏やかな中国山地を下り、横田盆地をゆるやかに流れた後、山間峡谷部を急流になって下り、途中三刀屋川等の多くの支川を合わせながら北に流れ、山間部を抜けて下流に広がる出雲平野を東に貫流し、宍道湖、大橋川、中海、境水道を経て日本海に注ぐ幹川流路延長153km、流域面積は 2,540 km<sup>2</sup> (神戸川含む) の一級河川です。



●斐伊川の源 船通山(奥出雲町)



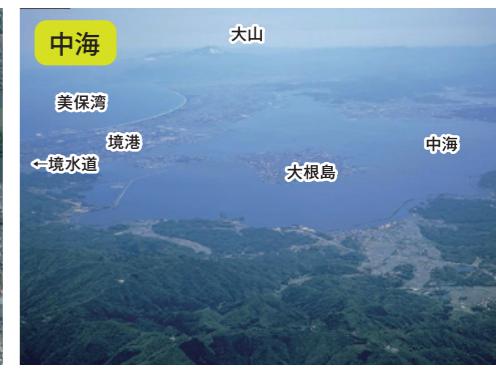
●鬼の舌震(したぶるい)(奥出雲町)



●出雲平野を流れる斐伊川



●宍道湖と中海をつなぐ大橋川(松江市)



●松江市より中海・境水道を望む

## 神戸川の概要

斐伊川放水路を通じて、斐伊川と繋がる神戸川は、その源を島根県飯石郡赤来町の女亀山(標高830m)に発し、途中頓原川、伊佐川、波多川等の支川を合せながら北に流下し、出雲市を貫流した後、新内藤川を合わせて日本海(大社湾)に注ぐ幹川流路延長82kmの一級河川です。



●神戸川の源 女亀山(飯南町)



●立久恵峠を流れる神戸川(出雲市)



●日本海へ注ぐ神戸川(出雲市)

# ヤマタノオロチ伝説と斐伊川

日本最古の歴史書とされる『古事記』(712年)や、その後編纂された『日本書紀』(720年)には、斐伊川が流れる島根県東部の出雲地方において、ヤマタノオロチという、八つの頭を持つ巨大な大蛇「ヤマタノオロチ」の伝説が残されています。

## (古事記より)

このヤマタノオロチ伝説の主人公は、スサノオノミコトです。天照大神の弟であるスサノオは、神々が暮らす高天原で粗暴を行い、追放されたスサノオは、斐伊川の源流である船通山に降り立ちます。

上流から流れる箸を見たスサノオは、川を上っていき、うら若い少女と手を取り合って涙する老夫婦に出会います。泣いている理由を尋ねると、毎年ヤマタノオロチという怪物に娘を差し出さなければならず、今年は8人いた娘のうちの最後の一人が餌食になると答えます。

そのヤマタノオロチとは、「目は真赤なほおずきのよう、一つの身体に、頭が八つ、尾が八つもございます。またその胴体には苔が蒸しており、さらには檜や杉なども生えております。その長さは八つの谷、八つの山峠を這いわたるほどで、その腹を見れば、不斷に血が流れ出して血膿のようにただれています、まったく恐ろしい怪物」とされています。

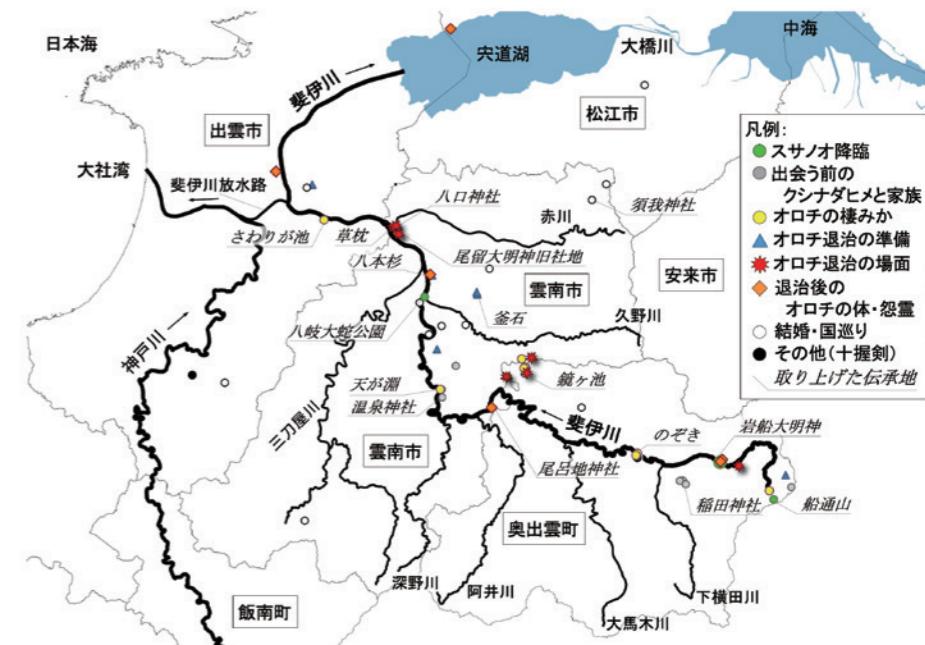
スサノオは、そのクシナダヒメという少女を妻に迎える了承を得ると、ヤマタノオロチ退治に乗り出します。

垣根をめぐらせて八つの門をつくり、それぞれにヤマタノオロチを眠らせるため、強い酒を張った酒樽を置きました。そこに凄まじい勢いで現れたヤマタノオロチは、八つの頭を八つの酒樽にひたして、全ての酒を飲み干します。強い酒が体に回ったヤマタノオロチは、さすがに寝込んでしまいます。この機を待っていたスサノオは、腰から刀を抜くと、八つの頭を次々と切り落としました。

ヤマタノオロチを退治したスサノオはその後、クシナダヒメと結婚し、多くの子どもにも恵まれました。

斐伊川流域には、このヤマタノオロチ伝説に関する伝承地、口承地が数多く残されています。

このヤマタノオロチ退治が、斐伊川の治水を表現したものであり、毎年のようにはん濫を起こしていた斐伊川そのものであるという説があります。



## 船通山

スサノオノミコトが高天原を追放された後に降臨したとされる、斐伊川源流がある山。



## 八岐大蛇公園

スサノオノミコトが上流から流れてくる箸を拾ったとされる場所。



## 天が淵

ヤマタノオロチが住んでいたところと伝わる、斐伊川の上流、雲南市木次町と雲南市吉田町境。一見流れはゆるやかで水深も浅いように見えますが、斐伊川が大きくカーブしているあたりの岩は底が大きくえぐられ、水も渦を巻き、危険な場所といわれています。



## 草枕(雲南市)

スサノオの策略により、ヤマタノオロチが酒を飲んで酔っぱらい、枕にして寝たと伝わる山。斐伊川と赤川の合流する箇所にあたり、度重なる氾濫が起こった場所でもあります。



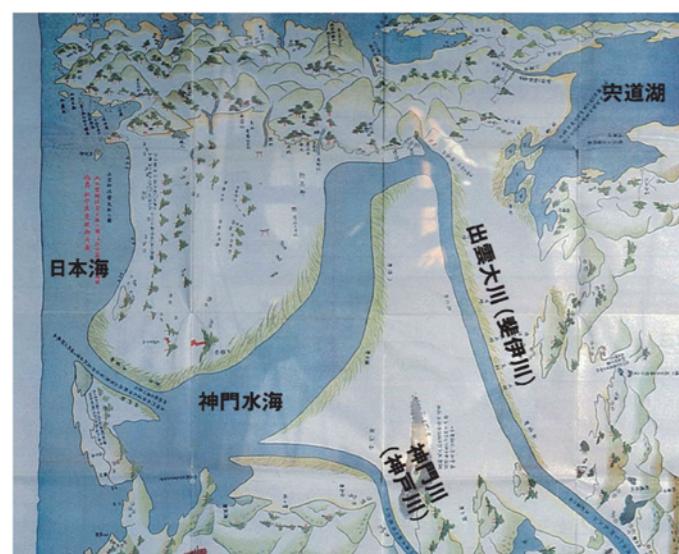
## ■幾度となく流れを変える「暴れ川」

斐伊川は古来より氾濫を起こしては流域に多大な被害をもたらし恐れられてきましたと伝えられています。かつての斐伊川と神戸川は、出雲平野を西に流れ、共に神門水海(現在の神西湖の前身)に注いでいた歴史があります。その後、寛永年間の大洪水を契機に斐伊川は流れを変え東流し宍道湖に注ぐようになったといわれています。この斐伊川の東流により、宍道湖周辺(松江城下)での浸水被害が頻発するようになりました。

洪水年表(明治以前)

年号	西暦	被 告 状 態
養老年間	717~723	大洪水があり、斐川村、久木、直江村に大災害があった。
点正元年8月27日	1573	大洪水で石塚村の一本松堤防が決壟。
慶長元年	1596	国中洪水、宍道湖 れて末次一村亀田山に遭難
寛永10年5月27日~28日	1633	斐伊川武志堤防東に決壟、鎧ヶ崎掘貫埋没、大原里坊八本杉倒れる。
寛永12年	1635	大出水により、北田南田町は勿論、北堀、母衣町、雑賀町、中原町辺一帯に大浸水をきたし低地にある家屋百数十件が浸水。
寛永16年5月20日~21日	1639	出雲大洪水。武志堤防決壟し本流完全に東流する。
延宝2年6月25日~28日	1674	大洪水で松江浸水。大橋20余日間落ちる。死者229名、家屋流出1,450戸、減収7,75,250石。
元禄15年8月27日~9月3日	1702	大洪水により武志および伊丹堂西堤決壟し、杵築まで一面の湖水となる。死者50名、家屋流失4,157戸、減収84,294石。
享保6年	1721	大風雨洪水、城下4尺、郡邑2丈6尺の増水。死者4名、家屋流失255戸、減収47,130石。
享保7年	1722	洪水、死者54名、家屋倒壊・流失928戸、減収40,169石。
天明2年	1782	長雨洪水、減収49,444石、その他被害多数、秋大飢饉。
天明4年	1784	洪水、減収30,000石。
文政9年5月31日~6月1日	1826	長雨洪水、死者130名、減収54,222石、その他家屋倒壊、堤防決壟多数。木次町流失。
天保7年	1836	夏甚雨洪水、出水平地2丈2尺、山崩7,000箇所、減収138,000石、大飢饉。
弘化4年5月~6月	1847	甚雨洪水、堤防破損32,500余箇所、道路の崩壊46,980歩、橋梁流失1,270箇所、山崩6,970箇所、減収103,500石。

これより東流



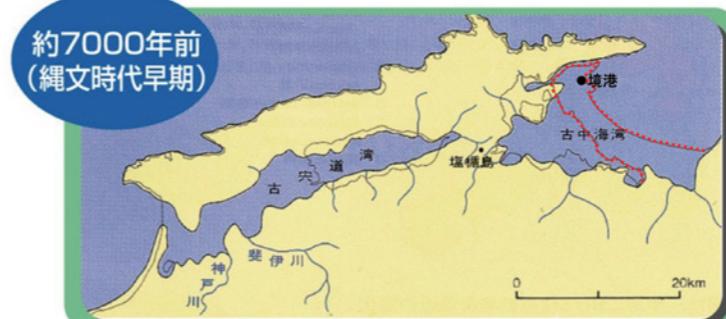
約1200年前(往古簸川西流絵図)西向きに流れる斐伊川  
(島根県立図書館所蔵)



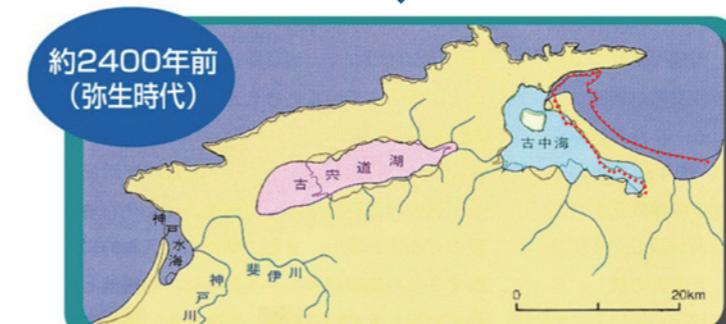
約370年前(寛永出雲国絵図)東向きに流れる斐伊川(島根大学附属図書館所蔵)

## 島根半島の地形の変遷

■ 陸地 ■ 海 ■ 汽水 ■ 淡水



海面の上昇が進み、西部では大社湾から松江にのびる古宍道湖湾、頭部に伸びる古中海湾ができる。



弓ヶ浜が出現し、古中海湾は汽水湖になる。斐伊川は大社湾に流れ、宍道湖へは流れ込んでおらず、河口では土砂の堆積が進む。



斐伊川が大量の土砂で河床が高くなり、1630年代の洪水で流れを東へ転換。宍道湖は淡水に近い状態となる。日野川からの土砂で弓ヶ浜が急激に成長し、中海が誕生。



斐伊川の土砂で宍道湖西側の埋積はさらに進み、出雲平野が拡大。佐陀川の開削や大橋川の浚渫により宍道湖は低塩分の汽水湖になる。

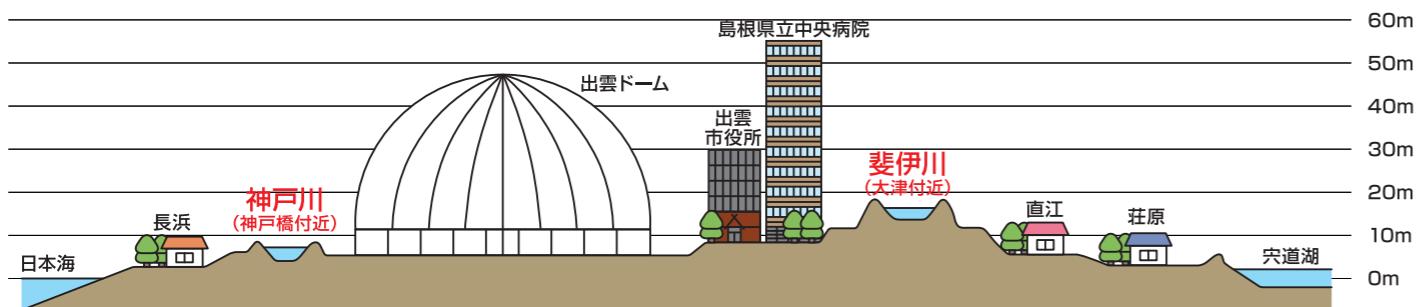
# 斐伊川水系の概要②

## 典型的な天井川

斐伊川上流域は崩れやすい特徴を持つ花崗岩に覆われており、崩れた土砂は真砂土として斐伊川に流れ込みます。この真砂土には良質の砂鉄が多く含まれていたため古来から「たら製鉄」が盛んで、砂を川に流して砂鉄を採取する「鉄穴流し(かんなながし)」が行われてきました。

このため、斐伊川は網状砂州の発達した典型的な「砂河川」となり、この大量の土砂により出雲平野が形成されました。

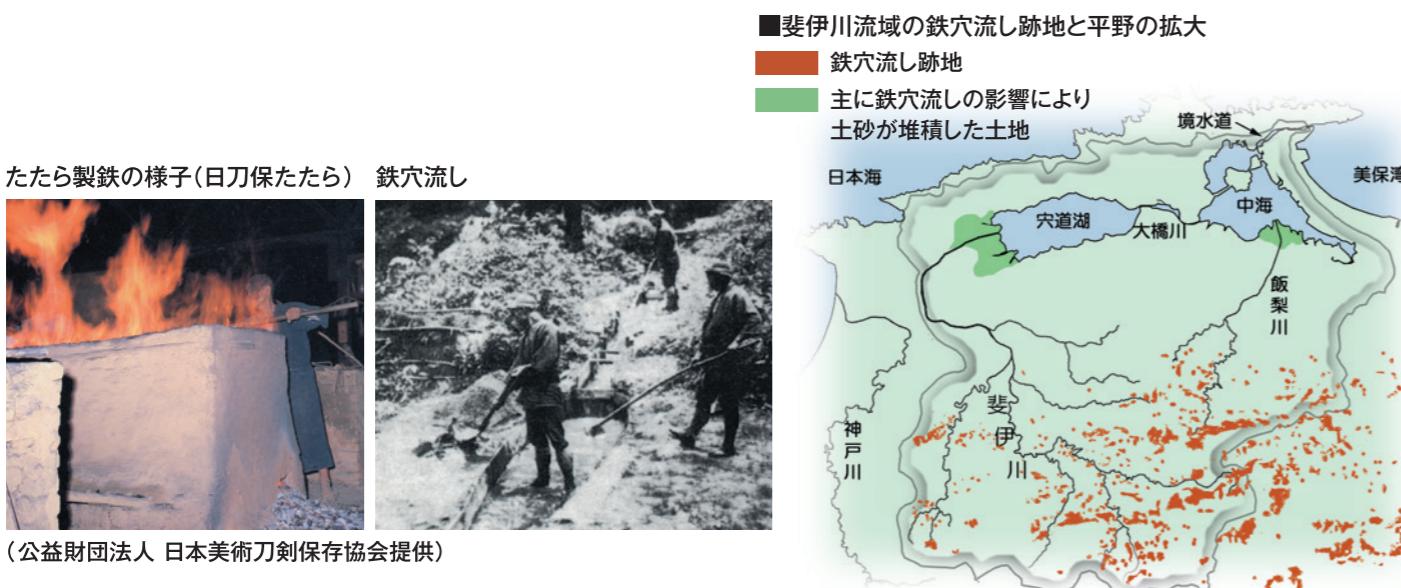
斐伊川からの大量の土砂は、出雲平野を形成すると同時に、斐伊川の河床に溜まって行きました。このため、洪水が増え、これに対して堤防を高くすると、また土砂が溜まるという繰り返しにより全国でも有数の天井川となりました。



## 鉄穴流し(かんなながし)

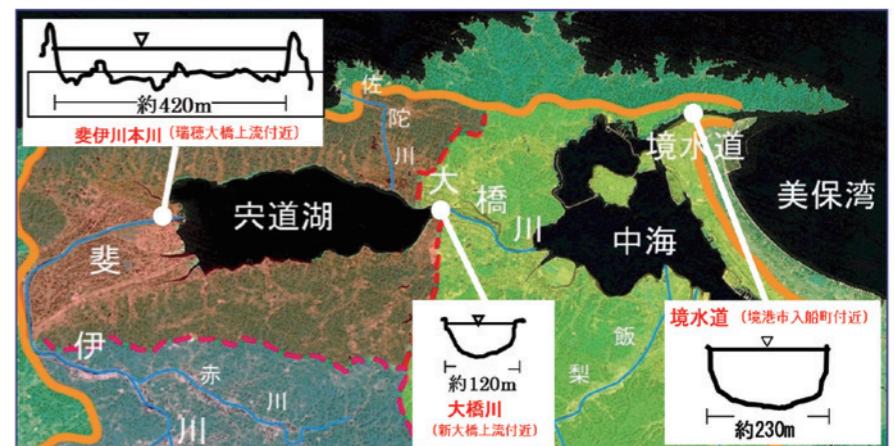
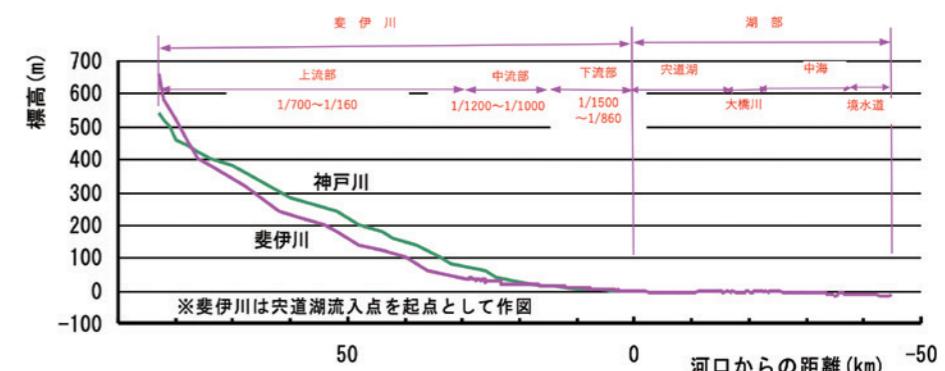
たら製鉄の原料となる砂鉄は「鉄穴流し(かんなながし)」と呼ばれる、山肌を切り崩して土砂を川に流し、比重の重い砂鉄分のみを分離する方法で採取されました。このため、砂鉄分が採取された後の土砂は斐伊川に流れ込み、大量の土砂を河道や下流域にもたらしました。

特に出雲地方のたら製鉄は「出雲國風土記」にも登場し、斐伊川上流域の主要産業でした。またこの製法により、18世紀から19世紀にかけては、全国一の鉄生産量を誇りましたが、20世紀半ばまでは近代の製鉄産業の台頭により消失の過程をたどっていきました。



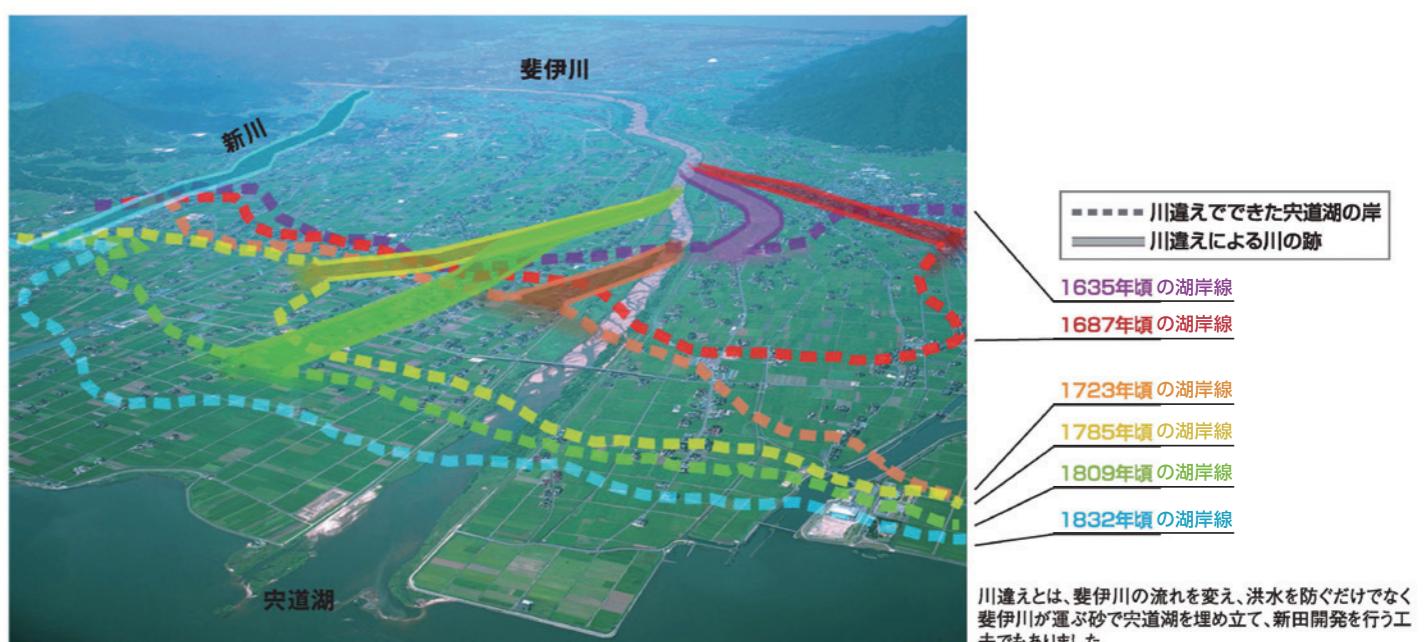
## みずは 水捌けが悪い河川

斐伊川の下流にある中海・宍道湖は、日本海との水位差がほとんど無く、宍道湖からの主な出口である大橋川は、川が小さいため斐伊川の下流部では水が流れにくい状況になっています。そのため、宍道湖では水位が上がりやすく、一度水位が上がると、溜まった水が流れ出るまで時間がかかるため、なかなか水位が下がりません。つまり、宍道湖及びその周辺の洪水は長引きやすいという特徴を持っています。



## かわたが 川違えによる対策

江戸時代に入り、たら製鉄の「鉄穴流し」が盛んになると、斐伊川下流に流出する土砂も大量になりました。この土砂により斐伊川の河床は上昇し、頻繁に洪水が起こるようになりました。そこで松江藩では、斐伊川下流の河道を40~60年ごとに移し替える「川違え」や佐陀川、新川などの開削により、氾濫を防ぐ努力をしてきました。

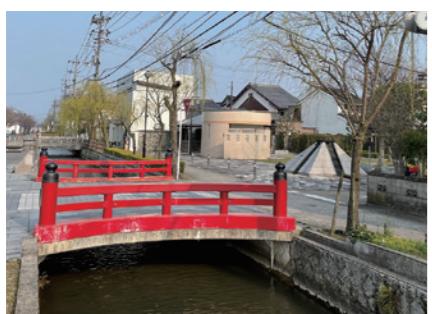


# 利水の歴史と現在

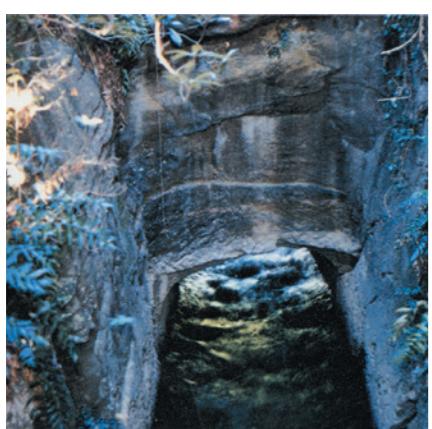
## 大梶七兵衛の功績



大梶七兵衛像（出雲市今市町）



出雲市内を流れる高瀬川



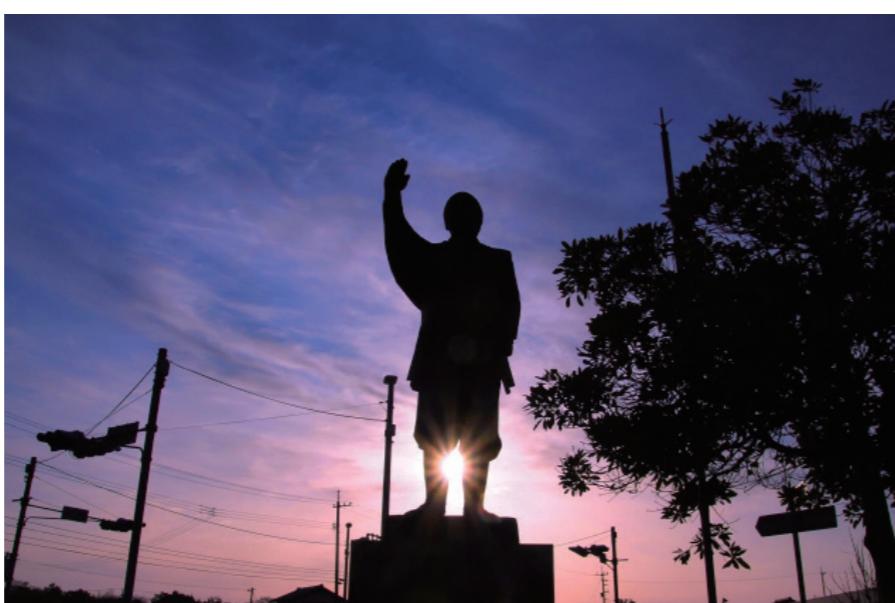
来原岩樋（出雲市大津町）

大梶七兵衛(元和7年(1621)～元禄2年(1689))  
11世紀後半、荒木浜(現在の大社町荒木)は日本海から吹き付ける強い西風にさらされ、用水の便を欠く不毛の地でした。七兵衛は、この地を開拓するため、藩の許可を受け、1675年から海岸砂丘に大防風林を造成しました。砂丘に植物を植え、風に運ばれた砂が固まるのを待って、また植物を植え付けることを繰り返して、荒木浜に見事な大防風林が生まれました。

その次に、斐伊川から水を引くための導水路「来原高瀬川」を開削します。川幅約6メートル、全長約8キロメートルに渡るこの用水路は、農業用水路や舟運経路として利用されました。

用水路を通す土地は、砂地のため水が地面に吸い込まれてしまうことから、川床にむしろを敷き、粘土で固めて水が漏れないようにしました。また、斐伊川からの取水施設は「来原岩樋」と呼ばれ、砂質の堤防が破れないよう大きな岩をくり抜いた構造になっています。

七兵衛はこの他にも、洪水の被害が生じていた神西湖の水を日本海へと流す差海川の開削や、南部の古志知井宮での十間川の開削など、大きな功績を残しました。



大梶七兵衛像（出雲市大社町）

## 農業用水の取水にかけた知恵と工夫

斐伊川下流域は天井川であるため、流水の多くが伏流水となり、特に渴水期にはほとんど表流水を見ないことがあります。そのため、この地域での耕作は用水の確保が最重要課題でありましたが、斐伊川の堤防は砂質を主体としていたため、通常の樋門などを設置した場合にはすぐに破堤する恐れがあったことから、農業用水の取水と洪水防御を両立できるを工夫しなければなりませんでした。



鰐の尾(なますのお)

渴水期に表流水がない時でも、河床を数10cm程度掘れば相当の水があるため、堤防沿いの河床に延々と水路を掘り、伏流水の流れ込みを受けて水量を増しながら取水する方法。



水寄せ

河川敷に溝を掘ったり、砂を寄せて樋管に水を導き取水を容易にする方法。

## 斐伊川の水利用の現状

### 農業用水

**【許可水利権】**  
斐伊川にて62件、約1,200haの耕地に最大4.2m<sup>3</sup>/secの取水  
神戸川にて14件、約700haの耕地に最大約1.5m<sup>3</sup>/secの取水  
**【慣行水利】**  
斐伊川にて約1,900件、かんがい面積約18,200haの取水  
神戸川にて217件、かんがい面積約2,200haの取水

### 工業用水

主に中海沿岸の新産業都市周辺一帯に島根県等に対して供給しています。また、志津見ダムでは、出雲地域における将来の工業用水の需要に応えるため、島根県に対し、新たに1日最大10,000m<sup>3</sup>の取水を可能とします。

### 水道用水

松江市、出雲市をはじめとする市町への供給のため、飯梨川、忌部川、斐伊川、神戸川等より約4.3m<sup>3</sup>/secの取水が行われています。  
また、尾原ダムでは、島根県東部の将来にわたる安全かつ安定した給水体制を確保するため、島根県企業局により、新たに1日最大38,000m<sup>3</sup>の取水が行われています。

### 水力発電

斐伊川では14箇所の水力発電所があり最大41,800kWの発電を行っています。  
神戸川では、4箇所の水力発電所があり、最大31,800kWの発電を行っています。  
また、志津見ダムでは、最大出力1,700kWの水力発電が行われています。

# 斐伊川水系治水事業のあゆみ

災害 計画 事業

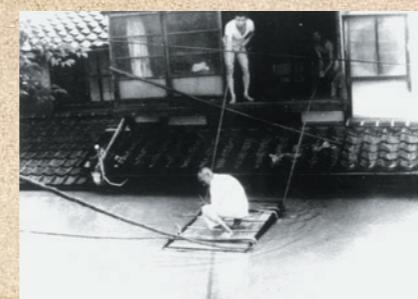
令和3年（2021）	上追子川水門・排水機場完成（大橋川改修）
平成27年（2015）	天神川水門完成（大橋川改修）
平成25年（2013）	斐伊川放水路運用開始
平成24年（2012）	尾原ダム建設完了
平成23年（2011）	大橋川改修の再開
平成22年（2010）	志津見ダム建設完了
平成21年（2009）	斐伊川水系河川整備計画（国管理区間）の策定
平成20年（2008）	中海土地改良事業の計画変更、神戸川の編入をうけ、河川整備基本方針を変更
平成19年（2006）	斐伊川放水路事業の進捗により、二級河川神戸川を一級河川斐伊川に編入
平成18年（2005）	梅雨前線による洪水発生
平成17年（2004）	中海、境水道で高潮等による浸水被害が相次ぎ発生
平成16年（2003）	農林水産省が、宍道湖・中海の淡水化中止
平成15年（2002）	斐伊川水系河川整備基本方針（島根県）の策定
平成14年（2000）	神戸川水系河川整備基本方針（島根県）の策定
平成12年（2000）	鳥取県西部地震発生（マグニチュード7・3、最大震度6強）
平成11年（1999）	放水路ふれあいセンター開所
平成6年（1994）	斐伊川放水路事業に着手
平成3年（1991）	尾原ダム建設事業に着手
昭和61年（1986）	志津見ダム建設事業に着手
昭和57年（1982）	大橋川改修に着手（同年10月に中断）
昭和51年（1976）	工事実施基本計画の改定（斐伊川・国、神戸川・島根県）
昭和47年（1972）	梅雨前線による洪水
昭和41年（1966）	斐伊川水系の一級水系指定 工事実施基本計画の策定
昭和40年（1965）	梅雨前線による豪雨発生
昭和39年（1964）	山陰北陸豪雨による洪水
昭和25年（1950）	直轄砂防事業に着手（昭和36年完了）
昭和20年（1945）	台風26号による洪水発生
昭和18年（1943）	斐伊川直轄改修事業に着手
大正12年（1923）	内務省改修計画を立案（5月7日 起工式）
明治26年（1893）	台風による洪水発生【治水事業の契機となつた洪水】



洪水時の出雲結(昭和18(1943)年)



阿宮堤防決壊(昭和20(1945)年)



旧加茂町洪水(昭和39(1964)年)



松江市洪水(昭和47(1972)年)



台風14号による高潮被害(平成15(2003)年)



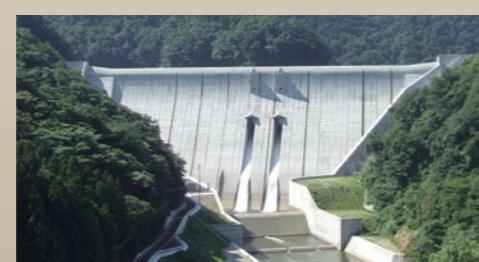
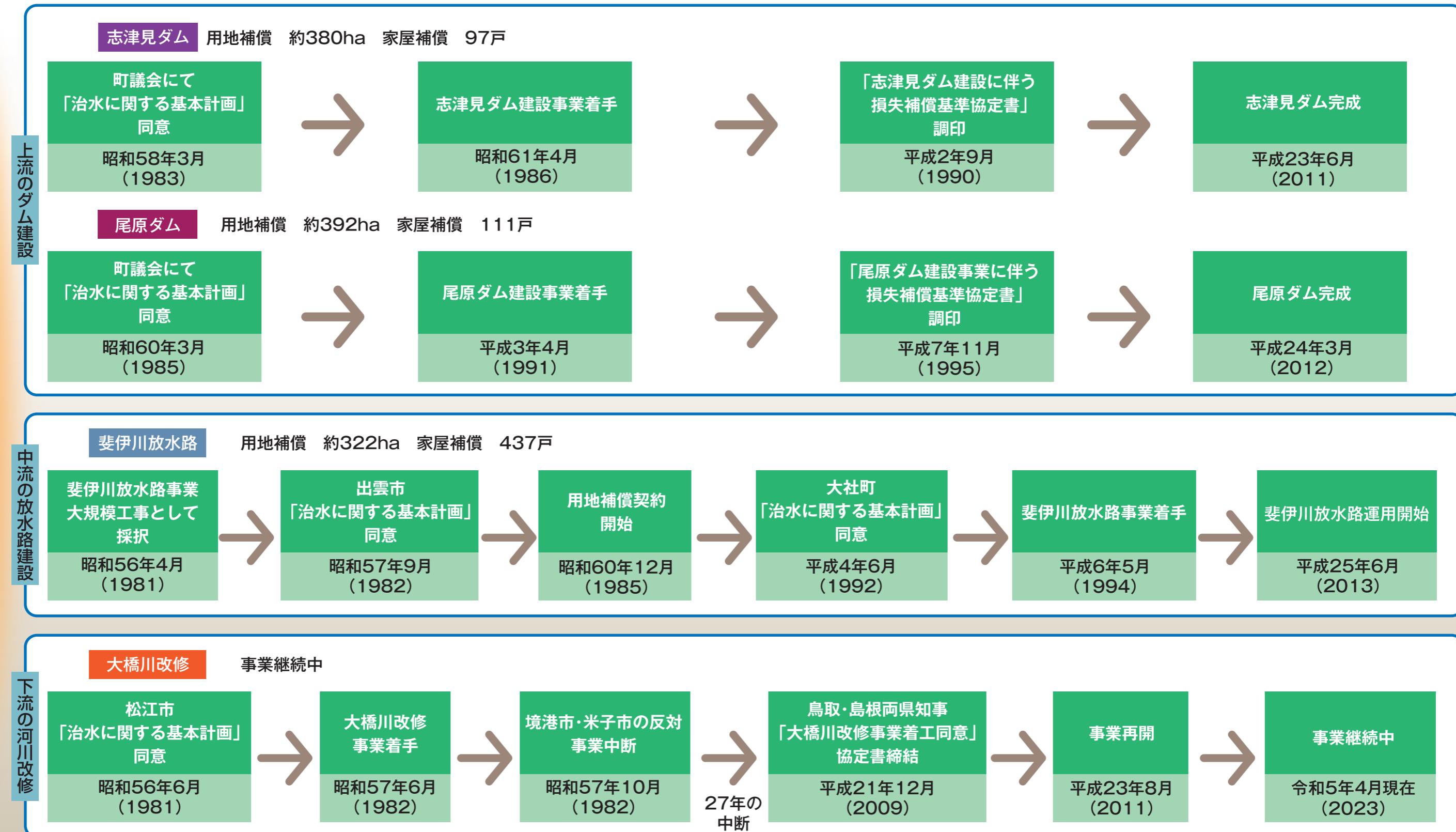
台風18号による高潮被害(平成16(2004)年)



松江市洪水(平成18(2006)年)

# 主な治水事業のあゆみ

## 「治水に関する基本計画」発表



志津見ダム



尾原ダム



斐伊川放水路



大橋川

# 洪水への初の科学的アプローチと直轄事業への着手

明治時代～昭和初期

斐伊川・神戸川改修100年のあゆみ

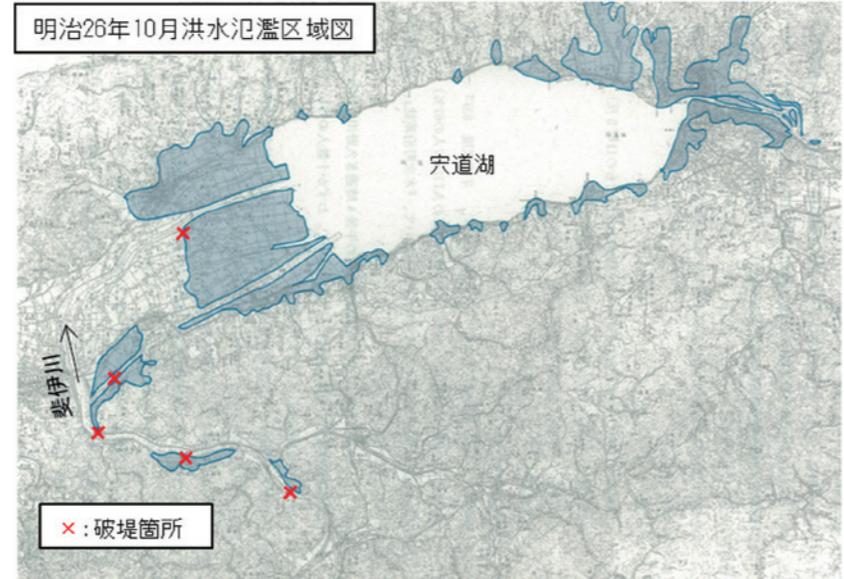
明治26年(1893)

## 明治26年10月水害の概況

明治26年10月12日夕刻から降り出した雨は、14日豪雨を伴った台風の通過により大洪水となりました。

斐伊川は上津村奥井谷沖、求院堤防石新田、坂田上、沖洲下の各堤防が決壊し、家屋の流出、死者がありました。さらに、松江市でも宍道湖が増水し全市にわたり氾濫しました。

流域平均2日雨量／301mm  
流量／約3,600m<sup>3</sup>/s  
死者／54名  
浸水家屋／19,133戸

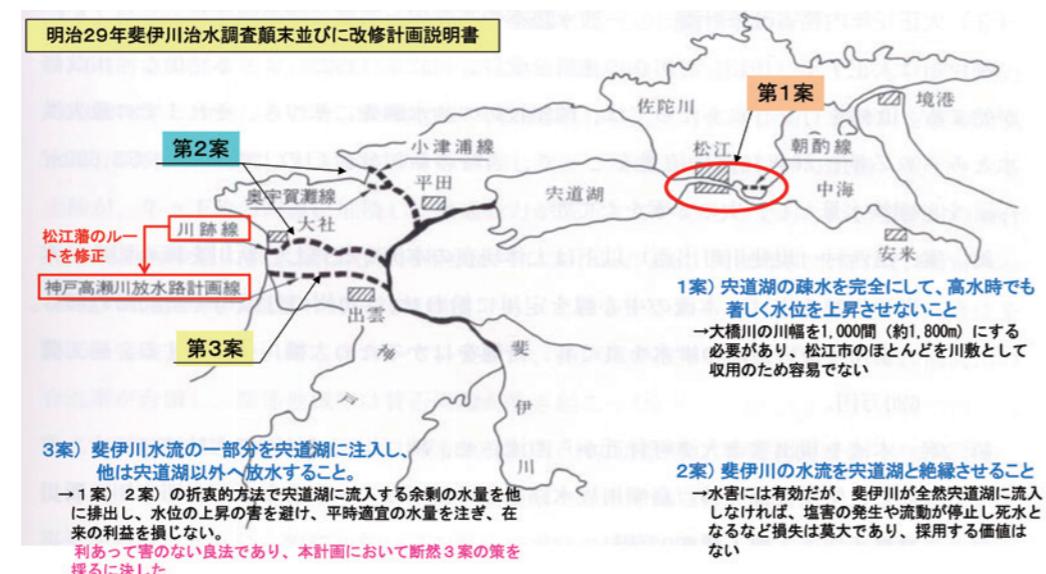


明治29年(1896)～大正11年(1922)

## 本格的な調査から直轄事業着手まで

当時は斐伊川のような大河川における治水事業は膨大な予算が必要となり、島根県では財政的に実施が不可能な状態でした。一方で、明治6年、13年、19年、20年と洪水が相次ぎ、特に26年10月の洪水では甚大な被害が発生しました。

これを契機に、島根県は内務省へ調査を要請し、洪水流量の解析などが行われました。これは斐伊川に関する科学的検討の最初のものとして高く評価されるもので、その結果は明治29年1月に「斐伊川治水調査顛末並に改修計画説明書」として島根県から発表されました。そこに記された改修計画において最良の方法として推奨された案は、洪水した流量を流す放水路の計画であり、今日の斐伊川放水路の基礎となっています。しかし当時の社会情勢などから実現することはありませんでした。その後、明治43年(1910)10月に策定された第1次治水計画の第1期施工河川(全20河川)として選定され、直轄改修事業に着手予定でしたが、予算計上されず、大正7年に河川法適応外に指定され、着手ませんでした。



大正11年(1922)

## 斐伊川直轄改修事業着手

大正時代に入り、第一次世界大戦の影響で砂鉄の採取量が増え、斐伊川の河床の状態も悪化します。大正9年(1920)には「斐伊川治水期成同盟会」が結成。改修請願を続け、翌大正10年(1921)には斐伊川改修法案が帝国議会を通過します。

この年に策定された第2次治水計画で採択された全81河川に斐伊川も含まれ、大正11年度から直轄改修事業に着手しました。

- この時の改修計画は、明治26年の洪水による被害から3,600m<sup>3</sup>/s(新川分流口上流地点)を目標とし、3つの案が検討されました。
- 斐伊川と大橋川を改修(右図の第1案)
  - 神戸川への付替え(右図の第3案)
  - 日本海(大社湾)への付替え(右図の第2案)
- このうち、取得用地が少なく、大橋川の舟運の便を増やし、工事費が最も少ない1案が採用されました。



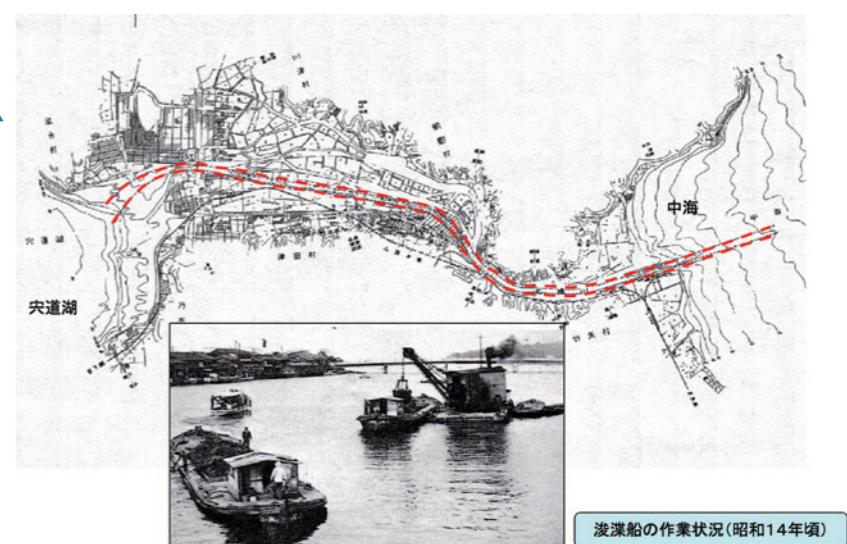
大正13年(1924)～昭和14年(1939)

## 大橋川筋改修

斐伊川直轄改修で最初に着工されたのが大橋川の浚渫です。工事は大正13年(1924)から昭和14年(1939)まで行われました。

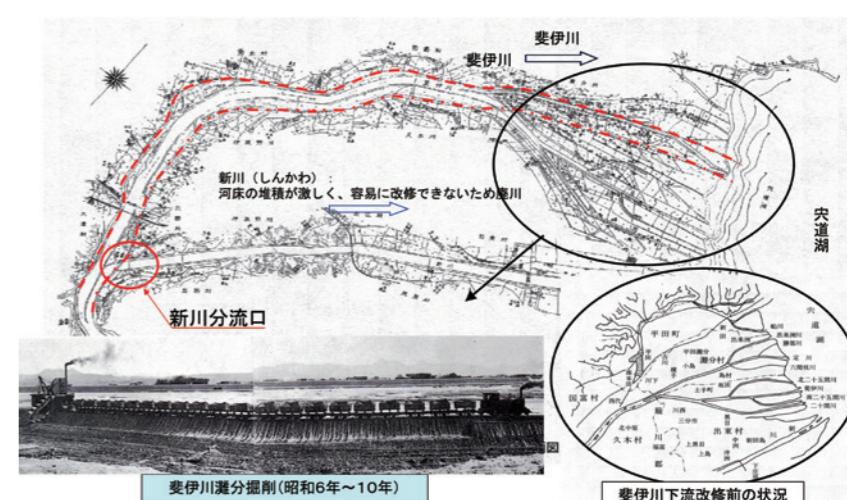
川幅の狭い箇所は拡幅して72mとし、これより広い箇所は河中ににおいて幅72mの部分を浚渫し、水深は平均水位以下約4.5mとし、崩れる恐れがある箇所には護岸を施工しました。

この工事により、宍道湖は中海から海水が逆流するようになり、宍道湖は汽水湖に変化しました。



## 斐伊川本川筋改修

斐伊川本川では、新川分流口を塞ぎ、計画洪水量(約3,600m<sup>3</sup>/s)の疎通を図るため、下流の川幅を広げ、河口付近で数本に分かれていた派川を定川筋に統合しました。



# 悪化する河床状況に迫られる抜本的対策

昭和初期～昭和44年(1969)

昭和18年(1943)～昭和20年(1945)

## 土砂が堆積する中での洪水被害

大正11年に着手した斐伊川改修は、その後の金融恐慌や戦争への突入により延長を余儀なくされ、昭和19年(1944)まで続きました。

その間、第二次世界大戦における砂鉄の乱獲による土砂の流出により、斐伊川下流部の堆積土砂は著しく増え、河積は縮小しました。

このような状況で、昭和18年(1943)9月と昭和20年(1945)9月には大規模な洪水が発生し、いたるところで堤防の決壊が起きました。

洪水に際しての流量は計画流量( $3,600\text{m}^3/\text{s}$ )の7割程度であったにも関わらず、計画洪水位を20cm突破しました。また、堤防裏法先の漏水が著しく、至る所で決壊が起こりました。

この洪水を受けて、昭和20年(1945)12月には、島根県の伊藤知事が根本的な大改修を提案し、斐伊川と神戸川の合流による治水対策の調査を促進する方針を表明しました。

これを受け昭和21年(1946)に内務省が「簸川治水測量事務所」を設置して測量に着手しましたが、各方面からの反対により、1ヶ月余りで閉鎖されました。

昭和23年(1948)～

## 直轄再改修計画

昭和18年と20年の洪水を受け、昭和23年(1948)には流送土対策と漏水対策を盛り込んだ、再改修計画が暫定的に樹立されました。

再改修計画

- 1 砂防工事による土砂流出の防止
- 2 低水路を設定し、流砂の疎通を向上させて堆積を防止
- 3 漏水の甚だしい箇所に石張(亀甲張)を実施して決壊を防止



昭和40年(1965)～

## 昭和40年代の治水事業の検討

昭和41年(1966)4月に斐伊川は一級河川に指定され、河川法に基づいて河川管理者が工事を実施する場合の基本的な事項として「斐伊川水系工事実施基本計画」が策定されました。これは、ピーク流量を明治26年洪水から基準点大津において $3,600\text{m}^3/\text{s}$ とし、工事に関して出西から宍道湖流入地点までの掘削、護岸工事ならびに下流での浚渫や漏水対策工事など、これまでの治水計画を踏襲したものでした。

また昭和40年(1965)1月に、建設省は治水構想の第1次案を発表しました。

- 1 中流に洪水調節ダムを建設
- 2 神戸川への放水路建設 等

この治水案のうち、2案が効果的であるとされました。特に合流地点より下流の神戸川では川幅が2倍になり、多くの田畠や住宅が放水路用地として取得されるのは犠牲があまりにも大きすぎるとして、地元から大反対を受け、改めて昭和41年4月に第2次案を発表しました。

しかしこの案は、川幅を第1次案より大幅に狭め、神戸川の計画高水位を上げるというもので、この川幅変更は地元に大きな不信感を募らせました。

進展が見られない中、地元島根県では昭和42年(1967)6月の県議会において、田部知事が治水対策に積極的に取り組む決意を表明しました。昭和44年(1966)6月に、「斐伊川・神戸川の治水および関係地域の開発に関する基本構想」を発表しました。

基本構想より

- 1 斐伊川の洪水の一部を出雲市内上流より放水路を設けて神戸川に分流。
- 2 両河川の上流に多目的ダムを建設し、洪水調整をはかると共に、農水、上水、工水などに利用。また周辺の地域開発も検討。
- 3 関係地域における補償と生活再建はそれぞれの実情に即して十分に検討。

大反対を受けながらも島根県の地道な努力により、昭和45年度からダムと放水路の予備調査が実施されました。

## 市街地を襲った昭和の大洪水

昭和47年(1972)洪水

昭和47年(1972)

## 昭和47年7月水害の概況

梅雨前線が中国地方に停滞し、北九州から中国地方にかけて断続的な大雨が降り、斐伊川、神戸川とも破堤寸前の危険な状況になりました。また、宍道湖の増水により松江市や出雲平野東部をはじめとする宍道湖沿岸約 $70\text{km}^2$ が一週間以上浸水しました。

流域平均2日間雨量／ $356\text{mm}$  家屋全・半壊／114戸  
基準点流量／ $2,400\text{m}^3/\text{s}$  浸水家屋／17,164戸  
死者／12名



## 昭和47年7月洪水による流域の被害状況



出雲空港は完全閉鎖10日間（約210日間の夜間閉鎖）されました。



## 斐伊川流域の総合的な治水事業へ

昭和50年(1975)～平成22年(2010)

昭和50年(1975)

### 斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画

昭和50年(1975)に恒松制治知事が当選すると、その年の6月定例議会において、斐伊川・神戸川の治水対策とそれに伴う開発計画について重大な覚悟で取り組むと表明します。そして同年10月27日に、「斐伊川・神戸川に関する基本計画」が公表されました。

この基本計画では、「治水基本計画」「生活再建対策」「地域開発構想」の3点からなり、治水計画においては、

- ・斐伊川、神戸川両河川の上流部へのダム建設
- ・斐伊川中流部から神戸川への洪水流量の一部を分流する放水路
- ・神戸川下流の抜本的改修、大橋川の拡幅、宍道湖・中海の湖岸堤改修を包括する河道改修

により、上・中・下流の流域全体で治水を負担し、昭和47年の洪水を受けて、基本高水のピーク流量を改定するものでした。(基準点斐伊川大津 5,100m<sup>3</sup>/s、神戸川基準点馬木3,100m<sup>3</sup>/s)

昭和54年(1979)

### 基本計画の基本的内容の発表

昭和54年(1979)11月、建設省と島根県は予備調査の成果に基づき、「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」の『具体的な内容』を関係市町ならびに県議会に提出しました。



昭和36年(1961)～平成3年(1991)

## 治水計画3点セットの着手

昭和57年(1982)、放水路予定地である出雲市の同意が得られ、斐伊川放水路予定地の本調査と用地買収が開始されました。

また、同年大橋川改修についても、矢田地区の実施測量に着手しました(同年10月に中断)。

平成18年(2006)

## 平成18年7月洪水

7月16日から19日の間、山陰地方を中心に梅雨前線が停滞しました。

斐伊川では観測以来の最高水位を更新し、最下流の灘分では計画高水位4.70mから67cmも超過した5.37mを記録しました。さらに、松江市でも宍道湖が増水し2日間にわたり浸水しました。

流域平均2日雨量／378mm  
基準点上島流量／約2,400m<sup>3</sup>/s  
家屋全・半壊／12戸  
浸水家屋／約1,500戸



平成14年(2002)・平成21年(2009)

## 斐伊川水系河川整備基本方針の策定と変更

平成14年(2002)4月に既定計画である工事実施基本計画を踏襲する斐伊川水系河川整備基本方針が策定されました。その後、平成17年(2005)1月に国営中海土地改良事業の計画が変更され、また平成18年8月に二級河川の神戸川が斐伊川に編入されたことにより、平成21年(2009)3月に変更が行われました。

- ・中浦水門の撤去による洪水堰上げの解消等により中海の計画高水位(H.W.L.)を変更
- ・宍道湖の汽水環境を維持するため、大橋川の掘削高と川幅を変更

平成22年(2010)

## 斐伊川水系河川整備計画

平成22年(2010)には、「斐伊川水系河川整備計画」が策定されました。これは、河川整備基本方針に沿って、具体的な川づくりを明らかにし、関係都道府県知事、関係市町村長及び学識経験者の意見聴取、地域住民の意見反映を行い定められたものです。斐伊川水系の今後概ね20年間の治水・利水・河川環境に関する整備目標や具体的な実施内容を示しています。

## 志津見ダム建設事業

昭和61年(1986)～平成23年(2011)



エンジョイ!ダム



## 志津見ダムの概要

志津見ダムは、一級河川斐伊川水系神戸川の島根県飯石郡飯南町角井地先に、防災操作、流水の正常な機能の維持、工業用水、発電を目的として建設された重力式コンクリートダムです。



定礎石



ダムカード

## エンジョイ!ダム

毎年6月にポピー祭り、毎年10月にコスモス祭りが開催されています。「最大100mmの降雨体験」や「やまめのつかみどり」「ステージイベント」など楽しい内容が盛りだくさんです。



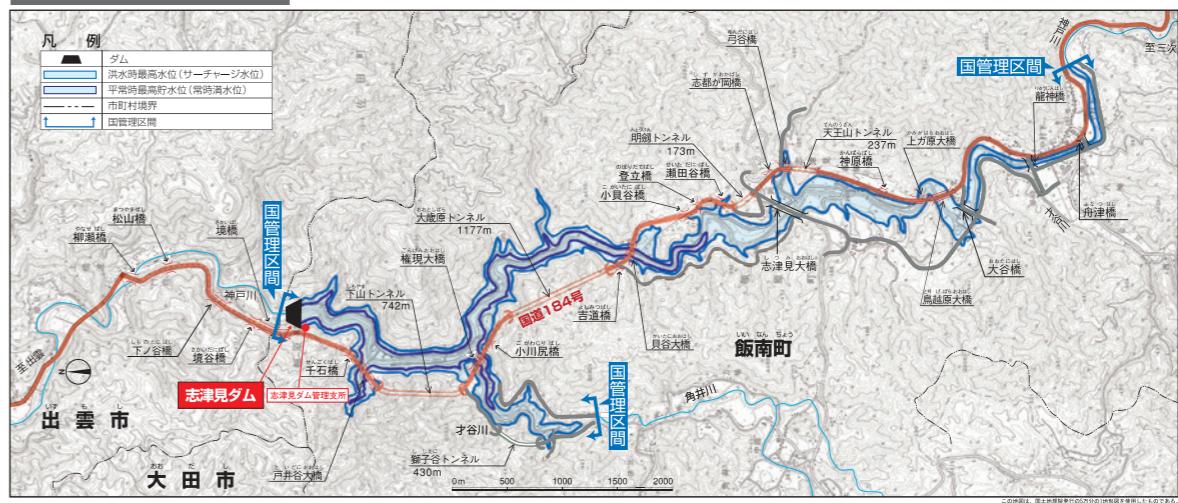
フラワーバレーのコスモス



## 事業の経緯

昭和54年11月(1979)	「治水に関する基本計画」発表
昭和58年 3月(1983)	町会議にて「治水に関する基本計画」同意
昭和58年 4月(1983)	実施計画調査に着手
昭和61年 4月(1986)	建設事業に着手
昭和62年3月・6月(1987)	「志津見ダム建設事業に伴う基本協定書」に調印
平成 2年 9月(1990)	地元4組織は「志津見ダム建設に伴う損失保証基準協定書」に調印
平成15年10月(2003)	転流開始
平成16年 6月(2004)	本体工事に着手
平成19年 5月(2007)	志津見ダム完成
平成21年11月(2009)～平成23年3月30日午前3時(2010)	試験湛水 満水位(サーチャージ水位)到達
平成22年12月12日(2010)	志津見ダム完成式
平成23年 6月 1日(2011)	志津見ダム完成

## 志津見ダムの管理区间



上流のダム建設

# 尾原ダム建設事業

平成3年(1991)～平成24年(2012)



## 目的

### 洪水調節

尾原ダム建設地点における計画高水流量2,500m<sup>3</sup>/sのうち、1,600m<sup>3</sup>/sの洪水調節を行い、斐伊川の洪水のピークを低減とともに、斐伊川放水路とあいまって斐伊川下流部の洪水を低減します。

### 河川環境の保全

ダム下流で利用されている用水の安定供給に寄与とともに、河川に生息・生育する動物・植物の保護のために必要な水を流します。

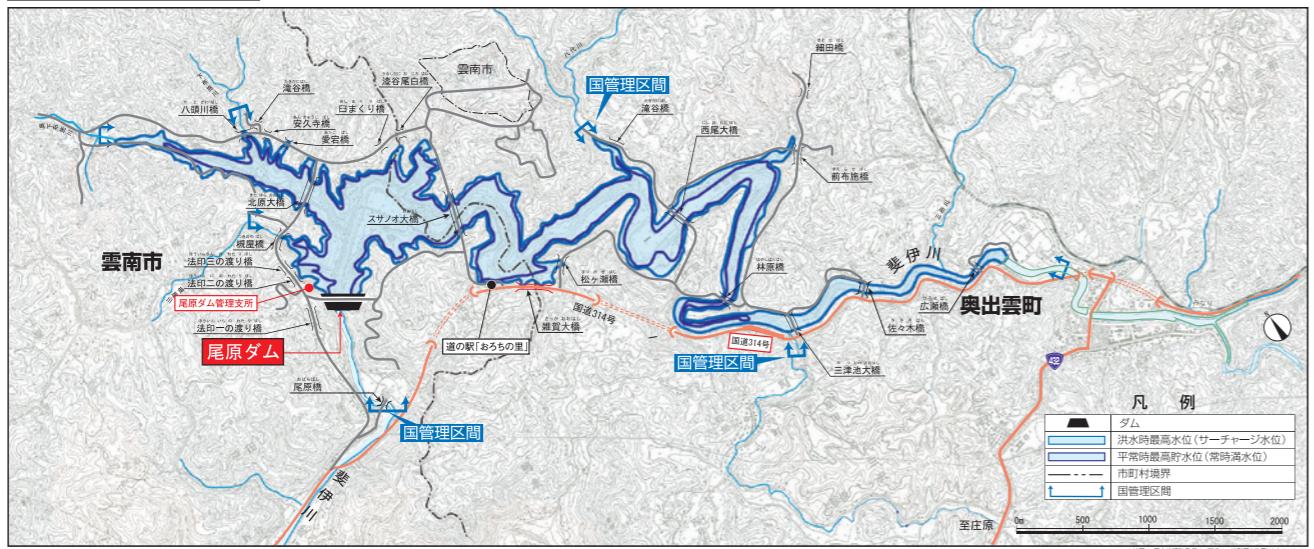
### 水道用水の供給

水不足が慢性化している島根県東部地域の3市に対し、新たに1日最大38,000m<sup>3</sup>の水道水を供給します。

## 事業の経緯

昭和54年11月(1979)	「治水に関する基本計画」発表
昭和60年 3月(1985)	町会議にて「治水に関する基本計画」同意
昭和62年 5月(1987)	実施計画調査に着手
平成 3年 4月(1991)	建設事業に着手
平成 3年10月(1991)	「尾原ダム建設事業に伴う基本協定書」に調印
平成 7年10月(1995)	地元3同盟は「尾原ダム建設に伴う損失保証基準協定書」に調印
平成17年11月(2005)	転流開始
平成18年 6月(2006)	本体工事に着手
平成20年 3月(2008)	尾原ダム定礎
平成22年11月(2010)～平成24年3月3日午前3時(2012)	試験湛水・満水位(サーチャージ水位)到達
平成24年 3月31日(2012)	尾原ダム完成
平成24年 6月 3日(2012)	尾原ダム竣工式

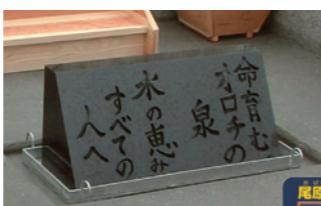
## 尾原ダムの管理区間



エンジョイ!ダム

## 尾原ダムの概要

尾原ダムは、一級河川斐伊川水系斐伊川の島根県雲南市木次町北原・平田地先に、洪水調節、流水の正常な機能の維持、水道用水を目的として建設された重力式コンクリートダムです。



## エンジョイ!ダム

ダム施設と水源地域が一体となり、秋のさくらおろち湖祭りや春のクロスゲート点検放流など多くのイベントが開催されます。



さくらおろち湖祭り

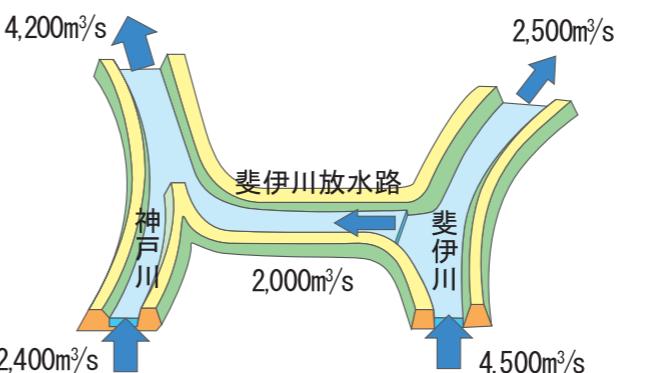
中流の放水路建設

# 斐伊川放水路事業

昭和56年(1981)～平成25年(2013)

## 斐伊川放水路の概要

「斐伊川放水路事業」は、斐伊川から神戸川に洪水の一部を分流する斐伊川放水路の建設及び神戸川の拡幅を行うもので、斐伊川放水路(開削部)4.1km、神戸川(拡幅部)9.0kmの総延長13.1kmにおよびます。昭和56年(1981)に事業着手し、平成25年(2013)6月に運用開始しました。



## 目的

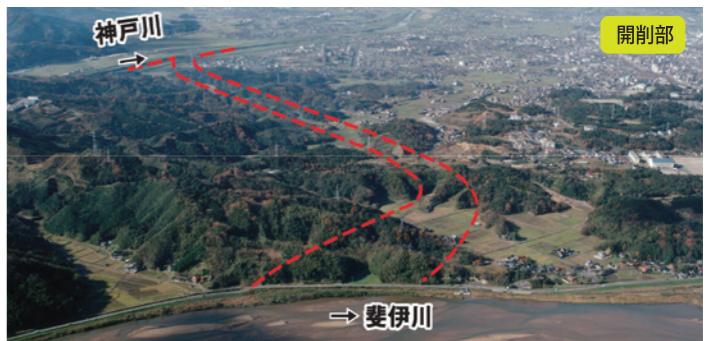
中海・宍道湖への洪水の流入量を減らすため、放水路を建設し、斐伊川から神戸川へ洪水の一部を分流します。

洪水を安全に流すため、神戸川の川幅を拡げ、斐伊川本川の改修も行いました。

## 斐伊川放水路事業のビフォーアフター



BEFORE



BEFORE



AFTER



AFTER

## 下流の河川改修 大橋川改修事業

昭和57年(1982)~

斐伊川・神戸川改修100年のあゆみ

### 経緯と主な関連工事

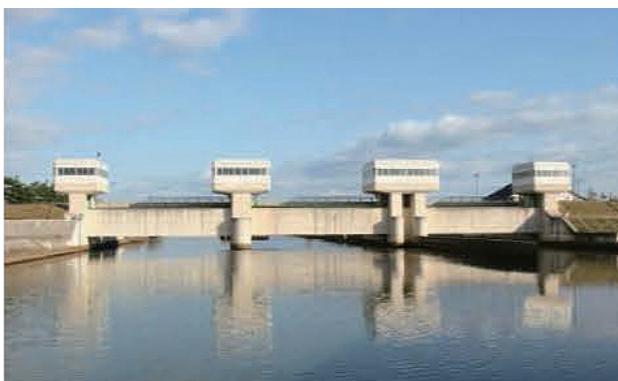
昭和54年11月(1979)	「治水に関する基本計画発表」
昭和56年 4月(1981)	斐伊川放水路事業を大規模工事として採択
平成 6年 5月(1994)	斐伊川放水路起工式
平成 8年 9月(1996)	開削部の掘削工事本格着手
平成 9年12月(1997)	拡幅部の堤防工事本格着手
平成10年11月(1998)	新内藤川水門竣工式
平成11年 3月(1999)	「放水路ふれあいセンター」開所式
平成11年12月(1999)	半分大橋開通式(放水路)【国道184号】
平成13年 4月(2001)	古志大橋開通式(神戸川)【県道多伎江南出雲線】
平成15年 7月(2003)	新内藤川排水ポンプ運用開始式
平成16年 3月(2004)	馬木吊橋開通式(神戸川)
平成16年10月(2004)	神戸堰起工式(神戸川)
平成18年 3月(2006)	大井谷橋開通式(放水路)
平成19年11月(2007)	神戸橋開通式(神戸川)【国道9号】
平成20年 4月(2008)	間府大橋開通式(放水路)【簸川南広域農道】
平成21年 2月(2009)	来原はたる橋竣工(放水路)
平成21年 3月(2009)	新神戸堰竣工・神戸堰橋開通式(神戸川)【市道神門293号】
平成21年 4月(2009)	斐伊川分流堰起工式
平成22年 6月(2010)	新内藤川水門本格運用開始
平成22年 6月(2010)	新神戸堰運用開始(神戸川)
平成22年 7月(2010)	菅沢大橋・菅沢橋開通式(放水路)
平成24年 6月(2012)	来原大橋開通(放水路)【主要地方道出雲三刀屋線】
平成25年 3月(2013)	斐伊川分流堰竣工
平成25年 6月(2013)	斐伊川放水路運用開始

### 水門・排水機場

新内藤川と午頭川が合流する神戸川付近に作られた新しい水門は、旧水門の幅の約2倍の大さがあり、神戸川からの逆流を防止するほか、潮止めの機能もあります。



新内藤川排水機場（出雲市西園町）



新内藤川水門（出雲市西園町）

### 分流堰

斐伊川放水路分流堰は、斐伊川の洪水の一部を斐伊川放水路に分流させるために、分流地点に建設した施設です。

斐伊川流域で2日間平均約400mmの雨が降った場合を想定して、斐伊川を流れる最大毎秒4,500m<sup>3</sup>の洪水量のうち、毎秒2,000m<sup>3</sup>の水を放水路に分流させ、下流の地域を洪水から守ります。



斐伊川放水路分流堰

### 橋梁

斐伊川放水路工事に伴い橋の改築・新設を行いました。



古志大橋（出雲市古志町）



馬木吊橋（出雲市朝山町）



### 大橋川改修事業の概要

斐伊川水系の大橋川は宍道湖から剣先川・天神川・京橋川・朝酌川が合流し中海に向けて流れています。

大橋川改修事業では、宍道湖から大橋川に入るについて川幅が狭くなっています。洪水被害を軽減を図るために、狭窄部の拡幅・堤防・水門等の整備を実施します。大橋川は県庁所在地である松江の市街地中心部を貫流するため、洪水対策のみではなく、環境・景観・まちづくりが調和する計画となるよう、住民・学識経験者・関係自治体と話し合いながら進めています。

### 大橋川改修事業の中断から再開まで

昭和50年(1975)	島根県知事により公表された「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」の斐伊川水系の治水計画の要の事業の一つとして大橋川改修を計画	平成13年6月(2001)
昭和51年(1976)	建設省(当時)により「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」が策定	
昭和54年11月(1979)	建設省と島根県により公表された「斐伊川・神戸川の治水に関する基本計画」の具体的な内容をもとに開始	
昭和57年6月(1982)	大橋川の矢田地区から測量調査に着手 大橋川の改修による下流域への洪水量増大を懸念する米子市議会・境港市議会の反対決議を受け、鳥取県は建設省と島根県に対し、用地測量・買収の中止要請	
昭和59年(1984)	鳥取県は人道的見地から矢田地区の用地買収を了承し、24戸の家屋移転と7,200m <sup>2</sup> の用地買収が完了(平成6年度(1994)末)	平成14年12月(2002)
平成12年9月(2000)	環境問題への関心の高まりや食糧事情の変化により、国営中海土地改良事業の本庄工区干陸中止が決定 本庄工区沿岸の湖岸堤整備を農林水産省から引き継ぐ形で国土交通省が実施することが決定	平成16年12月(2004)
平成13年3月(2001)	中国地方整備局長より鳥取県知事に対し「大橋川の調査」の同意要請	平成17年1月(2005)
		平成21年11月(2009)
		平成21年12月19日(2009) 鳥取・島根両県知事により、大橋川改修事業の着手同意 大橋川改修の大きな転機となり、事業着手に向けて再始動の準備が整う

### 松江市航空写真



# 湖岸堤整備事業

## 事業の経緯

平成22年9月(2010)	斐伊川水系河川整備計画策定
平成23年(2011)	追子地区:大橋川改修工事着手
平成24年(2012)	天神川水門ゲート新設工事着手
平成25年(2013)	竹矢田地区:築堤護岸工事着手
平成25年(2013)	井手馬潟地区:築堤護岸工事着手
平成26年(2014)	福富地区:排水門工事着手
平成26年(2014)	向島地区:築堤護岸工事着手、向島川排水門工事着手
平成27年(2015)	福富地区:築堤護岸工事着手
平成27年1月(2015)	天神川水門完成
平成28年(2016)	向島川排水門完成
平成28年(2016)	上追子川水門工事着手
平成29年(2017)	上追子川排水機場工事着手
平成30年7月(2018)	上追子川水門完成
平成31年2月(2019)	新大橋架け替えの基本協定を締結。
令和元年(2019)	東本町地区:築堤護岸工事着手
令和元年(2019)	朝鈴矢田地区:築堤護岸工事着手
令和2年10月(2020)	上追子川排水機場ポンプ施設完成
令和3年(2021)	松崎島:工事用道路工事着手
令和3年9月(2021)	上追子川排水機場工事完成
令和4年(2022)	松崎島:工事用仮橋完成

## 天神川水門

天神川水門は島根県立美術館の前に立地しており、岸公園から白潟公園にかけて宍道湖の美しい風景が見渡せることから景観に最大限配慮した「ライジングセクタゲート」と呼ばれる形式を山陰地方で初めて採用しました。

整備目的:宍道湖から天神川への洪水流入防止  
工事期間:平成24年(2012)11月~平成27年(2015)1月

## 環境変化に対する配慮

事業に伴う環境変化についてモニタリング調査を行い、影響を確認しながら、事業を進めています。特に、大橋川・宍道湖周辺の塩分変化やヤマトシジミ、コアマモ等に着目しています。

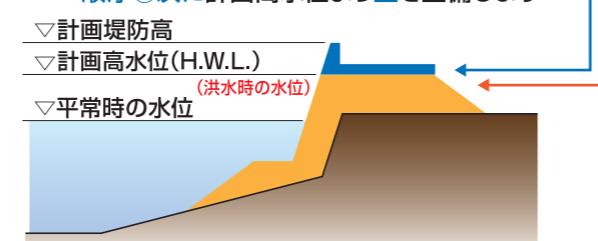


## 築堤護岸

堤防の整備は段階施工とし、計画高水位までの堤防高確保を先行して実施し、その後、計画堤防高まで堤防の整備を実施。計画高水位までの堤防の整備にあたっては、水害のリスクの高い箇所(平成18年7月洪水浸水実績箇所)等を優先的に実施。



順序①先ず計画高水位より下を整備します  
順序②次に計画高水位より上を整備します

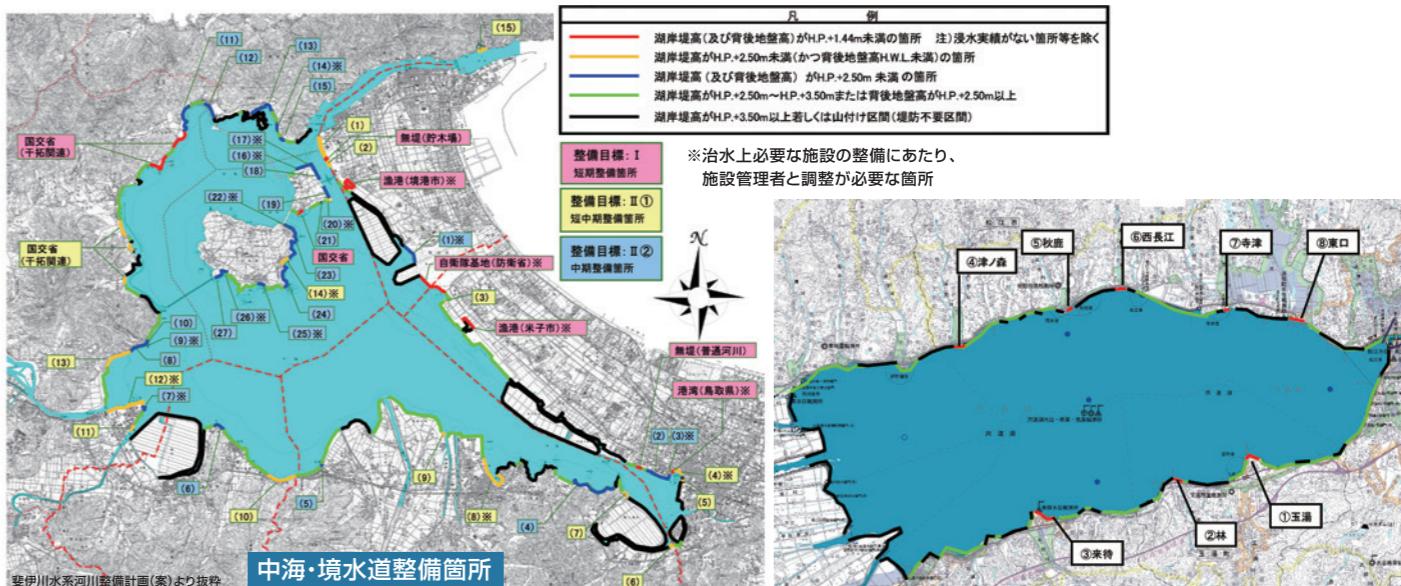


### 計画高水位(H.W.L.)

計画高水位とは、河川改修を行う場合に目標として設定される水位のことです。流水をこの水位以下で安全に流すよう河川を改修します。

湖岸堤高、背後地盤高、背後地の状況および過去の浸水被害の状況により、優先度を定めて災害リスクの高い地域から早急に湖岸堤の整備を実施します。

斐伊川水系では本川の堤防対策は概ね完了し、主に宍道湖・中海の湖岸堤の整備事業を実施しています。



### 湖岸堤整備実施箇所の進捗状況

【島根県】松江市八束町江島(江島港)



湖岸堤整備実施箇所の進捗状況  
【鳥取県】境港市西工業団地(貯木場・北・南)

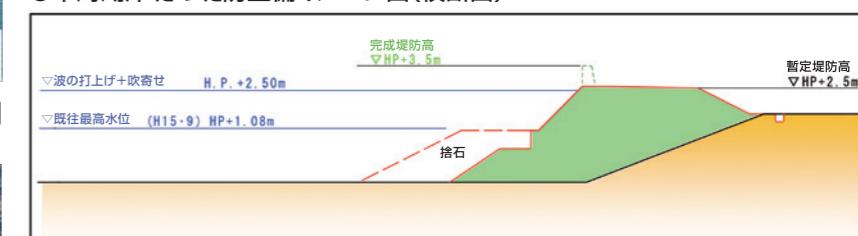


### ●中海湖岸堤の優先度の基本的な考え方

優先度	基本的な考え方	延長
短期 I	湖岸堤高がH.P.+1.44m未満(かつ背後地盤高H.P.+1.44m未満)であり、過去に越水による浸水実績がある若しくは背後資産の価値が極めて高い(H.P.+1.44m以下の地盤に100人以上居住)箇所 ※境水道においては、堤防高が計画高水位又は既往最高水位(波浪を考慮)未満(かつ背後地盤高が計画高水位未満)であり、過去に越水による浸水実績がある若しくは背後資産の価値が極めて高い(計画高水位以下の地盤に100人以上居住)箇所	4.0km (0.0km)
短中期 II①	湖岸堤高がH.P.+2.50m未満(かつ背後地盤高が計画高水位+1.30m未満)であり、背後に家屋等がある箇所 ※境水道においては、堤防高が計画高水位又は既往最高水位(波浪を考慮)未満(かつ背後地盤高が計画高水位未満)であり、背後に家屋等がある箇所	10.4km (0.3km)
中期 II②	湖岸堤高及び背後地盤高がH.P.+2.50m未満の箇所 ※境水道においては、堤防高及び背後地盤高が計画高水位又は既往最高水位(波浪を考慮)未満の箇所	15.4km (0.0km)
全体		29.8km (0.3km)

※( )は境水道の整備延長

### ●中海湖岸堤の堤防整備イメージ図(横断図)



※ 詳細な施工延長及び堤防形状については、背後地の土地利用状況、湖岸の植生等の生物環境、景観、被災の状況、地域住民等の意見も踏まえ精査します。

※ 渔港施設・港湾施設については、施設管理者と協議の上、構造等を決定します。

※ 承水路等の影響を受けない箇所については、計画堤防高をH.P.+2.1mとし、完成堤防で整備を行います。

※ 支川の処理については、支川管理者と別途調整します。



# 自然との共生を目指して

治水事業の推進に当たって行ってきた環境への配慮や地域住民が自然と触れ合える施設の整備、催し物の実施を行っています。

## 斐伊川水系生態ネットワーク

生態系ネットワークとは野生の生きものは、繁殖の場や採食場、休息する場など、さまざまな場を必要とし、それらの間を行き来・交流しながら、個体としての生活史や個体群を維持しています。生きものの生息に必要なまとまりのある重要な自然を守り、つくり、そしてつないでいく取組です。

現在では観光資源を活用し観光ツアーなどを実施しています。



## かわまちづくり

古くから培われた地域の歴史や文化、人々の生活とのつながりなど、水辺にはその地域特有の資源が眠っています。また、水辺はその使い方によって新たな価値を生み出す可能性を秘めています。かわまちづくりは地域の「顔」、そして「誇り」となる水辺空間の形成を目指します。

現在、斐伊川水系では「かわまちづくり」の取組を3箇所で行っています。

- 夕日ヶ丘地区中海かわまちづくり(平成28年3月登録)【完成】
- 中海・錦海かわまちづくり(平成31年3月登録)
- 木次地区斐伊川かわまちづくり(平成31年3月登録)
- 宍道湖・大橋川かわまちづくり(令和2年3月登録)

※()内はかわまちづくり支援制度に登録された年月

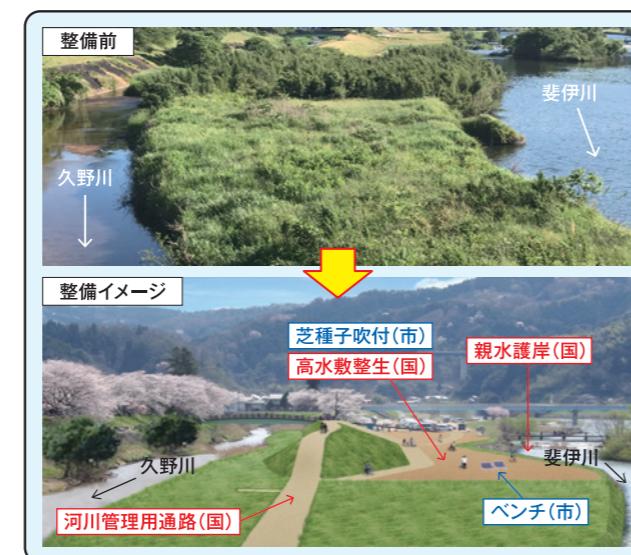
### 中海・錦海かわまちづくり



### 宍道湖・大橋川かわまちづくり



### 木次地区斐伊川かわまちづくり



## ミズベリング・プロジェクト



ミズベリング縁(えにし)

かつての賑わいを失ってしまった日本の水辺の新しい活用の可能性を、創造していくプロジェクトです。ミズベリングは「水辺+RING(輪)」「水辺+R(リノベーション)+ING(進行形)」の造語。

水辺に興味を持つ市民や企業、そして行政が三位一体となって、水辺とまちが一体となった美しい景観と、新しい賑わいをつぎつぎと生み出すムーブメントを起こしていきます。

### 水辺を満喫し、自由に過ごす3日間「ミズベリング縁日」を企画、開催

- 毎年10月の三連休で宍道湖湖畔での水辺イベント「ミズベリング縁日」を開催。(平成27年度~)
- 地元自治体や地域団体が一体となり、イベントを企画・運営
- 毎年来場者数が増加し、水辺での賑わいや地域活動として定着してきている。



水上での様々なアクティビティ



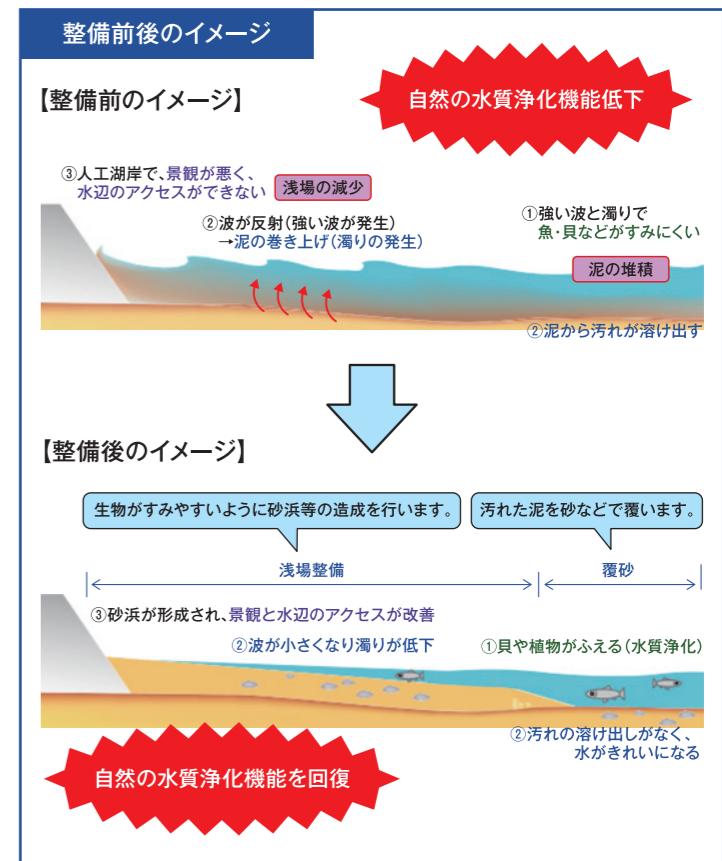
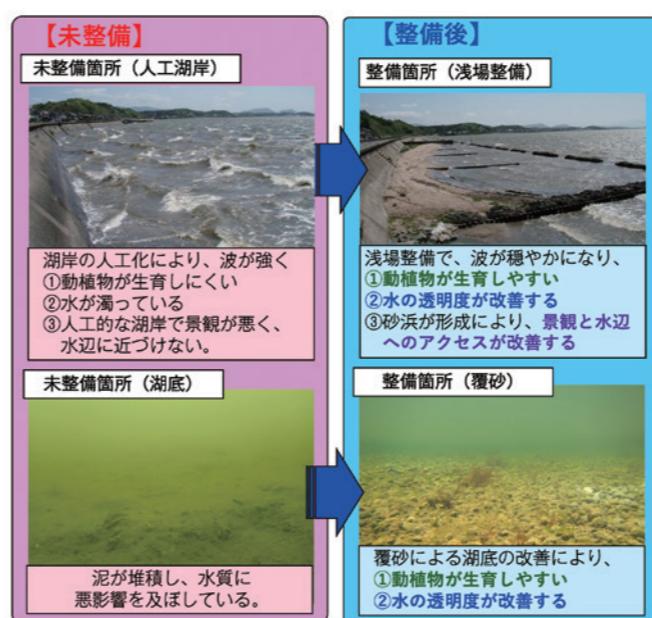
飲食ブースの様子



シジミ漁の体験

## 浅場整備事業

浅場整備事業は人工湖岸化や浅場の減少等により失われたかつての良好な湖沼環境の再生を目指し、人工化された湖岸前面の沿岸部において、生物が生息・生育可能な環境を再生し、湖の自然浄化機能を回復させ、水質の改善を目指しています。



# 斐伊川・神戸川改修100年の整備効果

斐伊川水系において戦後最大洪水となった昭和47年(1972)7月洪水、平成15年(2003)9月高潮時の浸水区域は整備計画3点セット①大橋川改修と中海・宍道湖の湖岸堤の整備②斐伊川放水路の建設と斐伊川本川の改修③志津見ダム・尾原ダムの建設)の治水事業完了後の効果により、大橋川流域では一部浸水区域があるものの、神戸川・斐伊川流域、中海・宍道湖での浸水区域が減り、大きく被害を軽減することができます。

昭和47年7月 梅雨前線による洪水被害



整備計画完了後(3点セット完了後)



洪水による家屋浸水  
浸水家屋 24,953 戸



斐伊川放水路分流時の様子

昭和47年7月の浸水区域は赤い地域が目立ちましたが、整備計画完了後は大橋川の一部にまで被害を抑えることが出来ています。平成18年7月洪水以降3点セットの②と③が概ね完了し、①を継続中ですが、大きな浸水被害は発生しておらず、効果が見てとれます。

平成15年9月 台風に伴う高潮被害



整備計画完了後(3点セット完了後)



高潮による家屋浸水  
浸水家屋 61戸



境港市 護岸工事後



松江市八束町 護岸工事後

高潮等による浸水被害を受け、家屋が付近にある地域を優先して護岸の整備を進め、早急に工事を要する箇所が概ね完了しました。この整備により、高潮等による浸水被害を軽減することができます。

# これからの100年に向けて

斐伊川・神戸川改修100年のあゆみ

- 気候変動の影響や社会状況の変化などを踏まえ、河川の流域のあらゆる関係者が協働して流域全体で行う治水対策、「流域治水」への転換を目指します。
- 治水計画を「気候変動による降雨量の増加などを考慮したもの」に見直し、集水域と河川区域のみならず、氾濫域も含めて一つの流域として捉え、地域の特性に応じ、①氾濫をできるだけ防ぐ、減らす対策、②被害対象を減少させるための対策、③被害の軽減、早期復旧・復興のための対策をハード・ソフト一体で多層的に進めます。

## ①氾濫をできるだけ防ぐ・減らすための対策

- 雨水貯留機能の拡大**  
[県・市・企業・住民]  
雨水貯留浸透施設の整備、ため池等の治水利用
- 流水の貯留**  
[国・県・市・利水者]  
治水ダムの建設・再生、利水ダム等において貯留水を事前に放流し洪水調節に活用
- 土地利用と一体となった遊水機能の向上持続可能な河道の流下能力の維持・向上**  
持続可能な河道の流下能力の維持・向上
- 河床掘削、引堤、砂防堰堤、雨水排水施設等の整備**
- 氾濫水を減らす**  
[国・県]  
「粘り強い堤防」を目指した堤防強化等

## ②被害対象を減少させるための対策

- リスクの低いエリアへ誘導／住まい方の工夫**  
[県・市・企業・住民]  
土地利用規制、誘導、移転促進、不動産取引時の水害リスク情報提供、金融による誘導の検討
- 浸水範囲を減らす**  
[国・県・市]  
二線堤の整備、自然堤防の保全

## ③被害の軽減、早期復旧・復興のための対策

- 土地のリスク情報の充実**  
[国・県]  
水害リスク情報の空白地帯解消、多段型水害リスク情報を発信
- 避難体制を強化する**  
[国・県・市]  
長期予測の技術開発、リアルタイム・浸水・決壊把握
- 経済被害の最小化**  
[企業・住民]  
工場や建築物の浸水対策、BCPの策定
- 住まい方の工夫**  
[企業・住民]  
不動産取引時の水害リスク情報提供、金融商品を通じた浸水対策の促進
- 被災自治体の支援体制充実**  
[国・企業]  
官民連携によるTEC-FORCEの体制強化
- 氾濫水を早く排除する**  
[国・県・市等]  
排水門等の整備、排水強化

